

# 地方観光地を活性化させるには

—海の京都 伊根—

## I テーマ設定の理由

私の祖父母の家がある京都府伊根町は、海に面して建てられた舟屋で知られ、「日本で最も美しい村」や「重要伝統的建造物群保存地区」に登録されている。

しかし、多くの観光客は京都市内の文化財を巡るだけで、伊根町に足を運ぶ人は僅かである。伊根町の知名度を高め、「海の京都」としてより多くの観光客を呼び込むためにはどうしたら良いのか、調査することにした。

## II 研究の目的

- ①伊根町の観光地としての現状を知る。
- ②観光地としての課題を見つけ、観光客を呼び込むための方法を考察する。

## III 研究方法

- ・文献調査より、伊根町の現状を調べる。
- ・アンケート調査・インタビューに加え、現地調査を行い、観光地としての課題、地元の人たちの観光化に対する意見等をまとめる。
- ・得られた意見等を踏まえて、伊根町を活性化させるための手段を提案する。

## IV 研究内容

### 1. 伊根町とは

#### (1) 位置

京都府北部、丹後半島の北端に位置し、東から北にかけては日本海、南は宮津市、西は京丹後市に接する。(図1)

#### (2) 人口

現在、約1000世帯2300人ほどが暮らす。(2015年6月時点)

減少傾向にあり、40%という高齢化率は、京都市内で最も高い。(図2)



図1 伊根町の位置(小学館クリエイティブ)

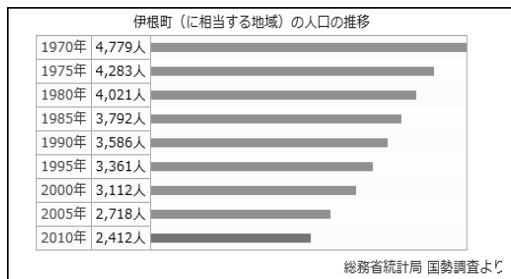


図2 人口の推移  
(総務省国勢調査)



図3 舟屋の様子

### (3) 伊根町の評価

#### ①重要伝統的建造物群保存地区

条例で定められた伝統的建造物群保存地区のうち、特に価値が高いものが選ばれる。現在110地区が登録されており、伊根町は舟屋の街並みが評価され、漁村として初めて取得した。(図3)

#### ②日本で最も美しい村

フランス、ベルギー、イタリア、カナダ、日本からなる、「美しい村連合会」に伊根町の美しさが認められ、2008年に加盟した。地域間の交流やプロモーション活動を行っている。



図4 美しい村連合会のロゴ(左)とフェスティバルの様子(右)  
(美しい村連合ホームページ)

### (4) 観光客の推移

平成5年のNHK朝ドラ「ええによぼ」の舞台となり、観光客・消費額がともに急増したものの、現在は停滞している。また、一人当たりの滞在時間が平均1時間と短く、宿泊客数が伸び悩んでいる。滞在時間の延長は観光消費額の増額、地域の活性化にもつながるため、対策が求められている。(図5)

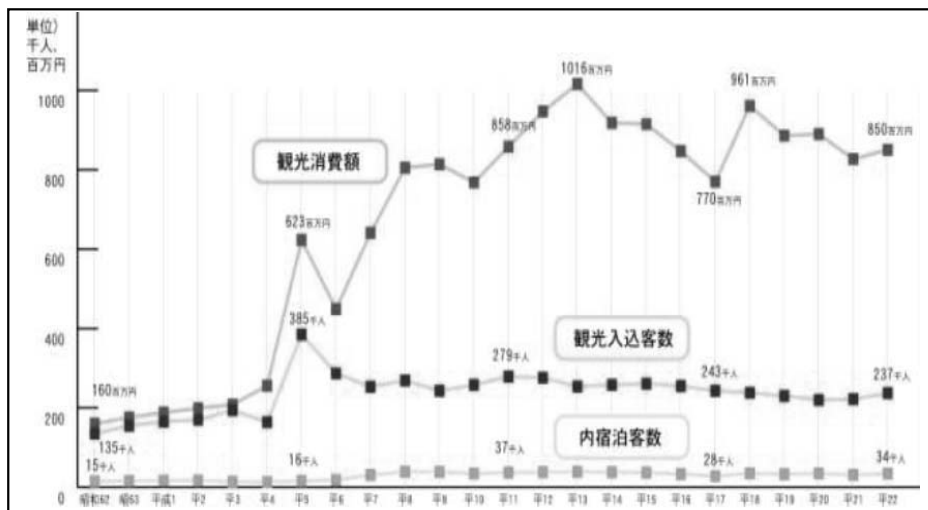


図5 観光客の推移  
(伊根町ホームページ)

## 2. 観光地に求められる条件とは

現在、所得の増大・余暇の増加・航空網の発達などにより、旅行は人々に定着した。特定の層・目的によらず、広く大衆に広まった旅行をマストツーリズムと呼ぶ。これにより、観光地には、次の4つの条件が求められるようになった。

- ①観光資源 寺社や自然といった、観光の対象となるもの。ネット社会の今、写真ではわからない感動や発見を求める傾向にある。
- ②施設 宿泊施設や飲食施設、土産処が中心。その土地らしさ、すなわち個性と規模の大きさが求められる。滞在時間の延長につながる。
- ③サービス 案内サービスや公共サービス（治安・衛生面）
- ④媒介 交通の便と宣伝（PR活動）等

## 3. 現地調査

### (1) 目的

実際に伊根町に行き、地元の方の意見を聞くことで、伊根町の観光化に対する理解を深める。

### (2) 内容

先に述べた、観光地に求められる4つの条件をどのように満たしているのか、様々な視点から調査する。併せて、アンケート調査を行い、住民の意見を収集する。

### (3) アンケートの概要

対象者は30名（男性12名、女性18名）で、伊根町長の吉本秀樹さんをはじめ、町会議員の方々や民宿・食堂を運営されている方、舟屋に住んでおられる方にも、意見を伺った。

#### (4) 結果

- ①観光資源 アンケート調査で伊根町の良さを尋ねたところ、観光資源が多く含まれていた。(図6) このことから、観光資源には十分恵まれているといえるだろう。しかし、町が舟屋周辺をPRしすぎたために、海と山の間に隔たりがあると言う方もいた。また、舟屋の内部を見学できる所が多かったが、バリアフリー化が進んでおらず、高齢者には厳しい現状であった。
- ②施設 アンケート調査で伊根町の観光地としての課題を尋ねたところ、食事処・宿泊施設・土産処の増設といったように上位3つはすべて施設関連であった。(図7) 地元の食材を使った郷土料理はもちろん、舟屋を利用している施設がほとんどであったが、町全体で20軒ほどしかなく、受け入れ人数の少なさがうかがえる。さらに新鮮な魚のみを使用するため、食材に限度があると話す方もいた。また、家族経営の所が多いため、長期休暇時に店を閉めるというところもいくらか見受けられた。

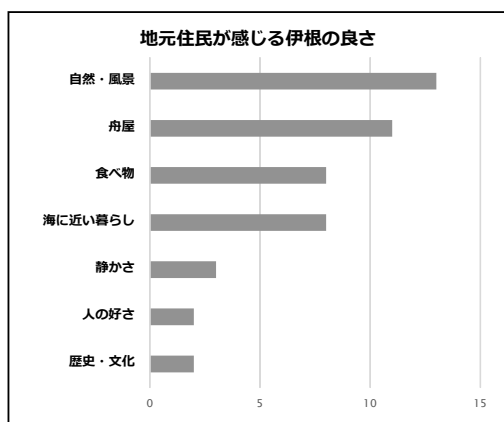


図6 (単位:人)

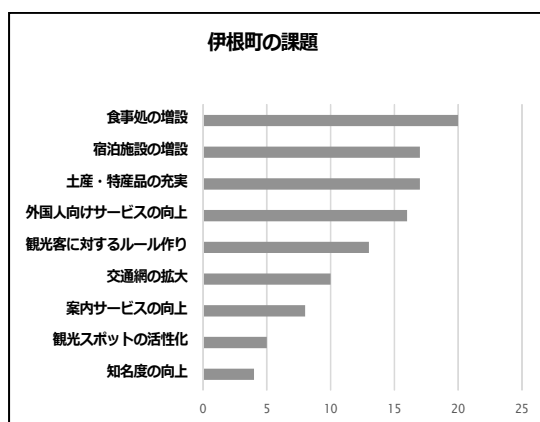


図7 (単位:人)

- ③サービス 案内サービスにおいては、海上タクシーを利用するなど工夫が見られた。しかし、地元住民の中には、公衆トイレの少なさを指摘する方もいた。これを受け、現在は民家のトイレを開放しているが、衛生面での整備もきちんと進める必要があるだろう。
- ④媒介 交通の面では、平成27年7月の京都縦貫道全線開通により、格段に便利になった。しかし、バスの本数が少ないことや母屋のすぐ後ろまで山が迫っているという地形から、道が狭く、事故や渋滞の原因となりがねないことが問題として挙げられる。宣伝においては、最近の知名度の向上や外国人向けガイドブックへの掲載から見ても、十分だと言えるだろう。

(5) 地元住民の観光化に対する意識

伊根町に多くの観光客が来ることを歓迎するかという質問をしたところ、下のよ  
うな結果が得られた。(図8) 観光産業に携わる方々は、活力・経済効果が生まれ、  
人口増加にもつながると期待されておられたが、地元住民の中にはマナーの悪さか  
ら生じる環境悪化や騒音などによって、自分たちの生活と伊根町の良さを奪われる  
ことを懸念されておられた。たとえ少人数であったとしても、伊根町の良さを根本  
から理解している人にこそ、訪れてもらいたいと願っているようであった。

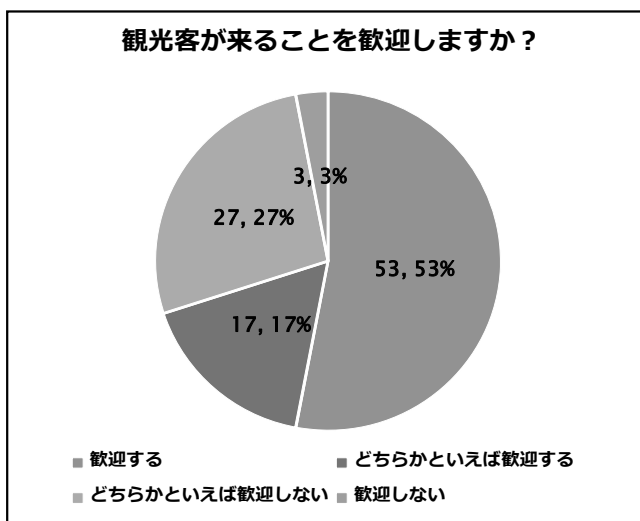


図8



図9 深刻になるごみ問題

## V 考 察

アンケート調査より、今後伊根町に最も求められるのは、観光施設の増設だと考える。観光の大衆化が進んだ現代、受け入れ人数の少なさは大きな問題であり、これを克服することで滞在時間の延長も見込まれるからだ。

しかし、これらの施設を多く作るということは、伊根町本来の、のどかな風景と住民の穏やかな暮らしに影響を及ぼすことになり、観光客のニーズにも逆行する可能性が考えられる。また、そうした影響を懸念し、観光化に不満を持つ方もいた。

そこで、私は住民の理解を得たうえで観光化を進める手段として、次の3つを提案する。

1つ目は、町全体を考えた観光開発である。無秩序な開発を抑えることで、自然破壊や景観の乱れも最小限に抑えることができるだろう。また、山と海の間にある隔たりを解消することで、舟屋付近の極端な開発を防ぎつつ、山の自然にも触れてもらうことが可能になるのではないだろうか。

2つ目は、観光客に対するルール作りである。1つ目と同様、伊根町の景観を守るために、徹底していく必要があるだろう。

3つ目は、観光によって得られた利益によって、町全体が潤うシステムを作ることである。住民の中には、観光によるメリットを実感できず、不満を持つ方もいた。得られた利益をインフラ整備や福祉に使うことで、町全体のモチベーションが高まり、より良い方向で観光化がなされるのではないだろうか。

## VI 感 想

今回の研究で、観光化がいかに難しいのか改めて実感した。観光客を呼び込むためには、多くの施設を作ったり、サービスを向上させたりしなければならないのに、それによって地域の魅力が失われることもある。だからこそ、開発する側は常に地元住民の声に耳を傾け、向き合っていくべきなのだと思う。

## VII 参考文献

- D V D 『伊根町町制施行60周年記念 日本で最も美しい村の営み』(2014)  
『伊根町誌』(1985) 伊根町  
『伊根浦の歴史と民俗』(1987) 京都府立丹後資料館  
澤 潔 (1991) 『丹後半島の旅』 文理閣  
前田 勇 (2015) 『新現代観光総論』 学文社  
山下晋司 (2011) 『観光学キーワード』 有斐閣  
和久田幹夫 (1989) 『舟屋むかしいま』 あまのはしだて  
伊根町公式ホームページ <http://www.town.ine.kyoto.jp/>  
伊根町観光協会 <http://www.ine-kankou.jp/>  
日本で最も美しい村 <http://www.utokusii-mura.jp/>